



稲高だより

静岡県立稲取高等学校

令和7年1月20日

第12号（通算176号）

まこと いっくしみ つとめる
「誠 愛 力」

静岡県高校生文芸作品コンクール作品

随筆 奨励賞 「あんな風に戦いたい」 11HR 望月 成さん（下田中）

「他の部活に行ってくれないかな。」希望していた写真部から唐突なお願い。高校での部活動は文化部に入ろうと決めていた。そしたらこの申し出。断ることもできたが申し訳なくならない承諾した。自分の他にも何人かが同じように言われていた。どうしようかと考えていると、ある友人が「レスリング部に行こうよ。」と誘ってきた。実は写真部以外に部活動見学に行っていなかったため他に行ける部活がなかった。しかし、そのレスリング部は部員が少なく、ずっと部員を募集していたため見学に行っていなくても構わないという。だから自分が入れる唯一の部活だった。最初は悩んだ。やったこともない部活を続けられるのかと。ましてやレスリング、あんな激しいスポーツができるのだろうか。そして悩みに悩んだ末、レスリング部への入部を決めた。「運動不足にならないしまあいいか。」という安直な考えで。

レスリング部の先輩は当たり前だが体格が良かった。それに加えて全国大会にも出ているのだというから、自分は全く場違いであると感じた。そして初めての練習。最初はマット運動からだった。当然上手くできるわけもなく、まともにできたのはせいぜい前転後転くらいだった。そんな簡単な技でさえ気持ち悪くなってしまい、早くも心が折れそうだった。正直情けない。そんな状態が続いてようやく初歩的な技ができるようになった。入部から約一ヶ月後、マット運動をこなせるようになってきたら本格的にレスリングの練習が始まった。最初は技を覚えることからだった。どの技も複雑で何度も失敗した。中には投げ技もあり、投げられるとももちろん痛い。そんな練習が始まってからは、モチベーションが下がりつつあった。「こんなじゃ試合出たときに恥をかくだけなんじゃ…。」そんなことを考えているときに顧問の先生が、先輩が出る大会に連れていってくれた。会場にはたくさんの選手がいて中には筋肉の塊のような人もいた。こんな人達と先輩は試合をするのかと驚いた。初めて間近で見るレスリングの試合。試合開始の笛が吹かれたとき自分の中でレスリングへの気持ちが変わった。幼稚な感想だが、シンプルにかっこいいと思った。相手を投げたとき、相手を組み伏せたとき、どれも見入ってしまった。先輩は想像以上に強く、試合を勝ち進めていき、中には優勝した先輩もいた。自分はすごい先輩たちと練習しているんだと改めて思った。

そのあとに先輩たちは高校からレスリングを始めたことを教えてくれた。自分も今高校からレスリングをしているがとてもあんな風にできるとは思えない。ただ今回の大会を見て少し元気が出た。自分もあんな風に戦ってみたいと高校生活での目標ができたから。入部当初では考えられない自分の気持ちに驚いた。同時に試合に出たときの自分がどうなるか楽しみだった。

随筆 奨励賞 「生きがい」 13HR 鈴木 真悠さん（熱川中）

水泳、それは私の生きがいだった。

幼稚園の年長の頃から九年間水泳を続けていた。私は記録が伸びていく嬉しさ、水泳の楽しさに気づいてから泳ぐことが大好きになった。どんなにきつい練習でも速く泳げるようになるためなら耐えられると思っていた。

中学生になっても水泳を続けたいという気持ちは変わらず、水泳に行けない日は学校の部活でテニス。あとは水泳、という形で生活をすることにした。私が習っている水泳クラブは、行くまでに片道一時間かかる距離で、最初はとても大変だったけれど泳げるのが嬉しかった。しかし、中学二年生になって突然タイムが伸びなくなった。そしてどんどん練習はきつくなっていった。他の子がきつい練習を楽しそうにやっていて、すごく悔しかった。もともと私は泳ぐのが速い方ではない。コーチからはのろのろ泳いでいるという理由で「おばあちゃん」というあだ名がつけられた。周りの子が楽しそうに泳いでいても、私は楽しいと思えなくなった。

水泳、それは私の生きがいではなくなった。もうすぐ三年生になる頃だった。私はとうとう水泳をやめたいと親に言ってしまった。あのとき「水泳を続けたい」なんて言わなければ、水泳を楽しんでいるなんて思わなければ、とすごく後悔した。どんどん年下にタイムを追い越されて、私の得意な背泳ぎも、気づいたら妹の方が速くなっていた。私は本当に辛くて、妹より速くなれないことに腹が立って、心臓が潰れそうだった。親に、「自分が続けるって決めたんだから最後までやりなさい。」と怒られた。私は親が言っていることが正しいと分かっていたから何も言えなかった。それでも水泳に行く回数を減らしてなんとか三年最後の中体連まで続けることができた。これで本当に最後、この一回を泳げば水泳から解放される。しかし、あれだけやめたかったはずなのに、なぜか水泳が生活からなくなることが突然怖くなった。今まで九年間、大変なこともあったけれどそれでも頑張って続けてきた…。

泳ぎ終わったあと、コーチに「速かったよ。」と言われた。今まで一度も言われたことがなかった。たった一言だけれど私にとっては水泳で頑張ってきたことが全て報われるようなすごく嬉しい言葉だった。

私はこれからは他の人より劣っているからという理由などで頑張っていることをやめることはしない。自分なりに頑張って続けていこう。そう思っている。

俳句 優秀賞 「熱帯夜」 22HR 赤井 結楽さん（稲取中）

熱帯夜 みぞれの味を 夢に見る